

幽霊船

小川未明

青空文庫

沖おきの方に、光ひかつたものが見みえます。海うみの水みずは、青あお黒くろいように、
 ものすごくありました。そして、このあたりは、北ほつ極きよくに近ちかい
 ので、いつも寒さむかったです。そして、

光ひかつたものは、だんだん岸きしの方ほうに近ちか寄よつてきました。そして、
 だんだんはつきりとそれがわかるようになりました。それは、氷ひ
 山やまであつたのです。

氷ひようざん 山やまはかなり、大おおきく、とがやまつた山やまのようすに鋭とどく光ひかつたと
 ころもあれば、また、幾いく人にんも乗のつて、駈かけつこをすることがで
 きるほどの広ひろ々びろとした平へい面めんもありました。そして、海うみの水みずの
 中なかには、どれほど深ふかく根ねを張はつているかわからないのでした。氷ひ

ようざん
山は、すべて、こうした水晶すいしょうのような氷こおりからできています。それが潮しおの加減かげんで漂ただよつてくるのです。

このあたりの海うみには、ほとんど、毎日まいにちのごとくこうした氷ひょう山ざんを見みました。あるときは、悠々ゆうゆうとして、この大きな氷の塊おおいは、あてもなく流ながれてゆきました。そして、遠とおくにゆくまで、その光ひかつたいただきが、望のぞまれたのであります。さびしい、入り日ひが、雲くもを破やぶつて、その氷山ひょうざんに反はん射しやしています。それは、遠とおく、遠とおくなるまで、岸きしに立たつて、ながめている人たちの目めの中に映うつつたのであります。

また、あるときは、この氷山ひょうざんが、まるで蒸気機関じょうききかんのついでいる氷の船こおりふねのように、怖おそろしい速力そくりよくで、目の前めまえを走はしつてゆ

くこともありました。しかし、この白い、光る、氷の上には、生きていますものの影はまったく見えなかったのです。

ただ、いつのことであつたか、こうした氷山が、岸に近づいてきましたときに、人々は、なんだか黒い小さなものが、氷の上うえに落ちているのを見ました。

「黒い鳥くろ とりだろうか？」

「鳥とりなもんか、海馬かいばか、オットセイだろう。」

岸きしに立つて、沖おきの方ほうを見ている人々ひとびとは、いいました。

しかし、それが、近づいたときには、大きくまであることがわかりました。くまはどうかして、陸りくに上あがりたいと、あせつているようでした。きつと、海うみの上うえが真まっ白しろに凍こおったとき、くまは

氷山の上まで遊びに出たのです。そのうちに、氷山が動きだして、陸との間が離れて、もうふたたび陸の方へ帰れなくなつてしまったのでしよう。みんなは、くまが、陸へ上がつてきてはたいへんだと思ひました。どんなに、暴れまわるかしのれないからです。

「おい、みんな気をつけたがいい、くまをこちらに渡してはたいへんだ。」と、口々にいいました。

それで、鉄砲を持ってきたり、槍などを持ってきたりしました。しかし、それまでに、氷山は陸の方へは近づかずに、ふたたび沖の方へと流れていつてしまいました。

みんなは、くまが渡れなかつたので、安心をしましたが、そ

のくまが、それから、どこまで流れてゆくだろうと思うと、かわいそうな気がしました。

こんなようなことのある、北の方に起こったできごとであります。いま、それをお話いたしましょう。

「もう、氷山もこなくなつた。海の上は、穏やかだから、漁に出かけよう。」というので、三人の漁師は、ある日のこと、船に乗つて、沖の方へこいでゆきました。

三人は、沖にあつた、一つの島に近づきました。その島には、だれも住んでいませんでした。この島には小さな湾があつて、よくこの湾の中にたくさん魚がはいっていることがあります。それで、漁師は、時分を見はからつて、この島に立ち寄つては漁を

します。獲とれるときには驚おどろくほど、獲とれることもありました。

三人にんは、湾わんの中なかに、船ふねを進すすめてようすをうかがいますと、たくさん魚さかながはいっているけはいがしました。

「これは、しめたものだ」

「しめたぞ！」

三人にんは、勇いさみたちました。そして、網あみを下おろして引ひくと、はたして、こんなとに獲とれたことがいままでもなかつたほど、たくさん獲とれたのであります。これをばみんな船ふねの中なかにいれたのでは、これから、もつと沖おきへ出でて仕事しごとをするのに邪魔じやまになりましたから、獲とれた魚さかなを島しまの浜はま辺べに上あげておいて、帰かえりに持もつてゆこうということにしたのであります。

三人にんの中なかの一人ひとりは、島しまに残のこりました。二人ふたりが夜よ帰かえつてくるときに、島しまで火ひを焚たいて合あ図いずをしようとしたからでした。乙おつの男おとこだけは、だれもいない島しまに残のこつて、甲こうと丙へいの二人ふたりが、勇いましい掛かけ声こゑをしながら、湾わんから沖おきの方ほうへ出でてゆくのを見み送おくつていたのであります。

「早はやく帰かえつてこいよ。」と、乙おつは、仲なか間まの二人ふたりに向むかつて、いいました。

「ああ、おまえがさびしがっているから、じきに引ひき揚あげてくるとも……。」と、二人ふたりは、笑わらいながら、だんだんと遠とざかつたのです。

穏おだやかな夕ゆ暮ぐれでした。乙おつは、じつと船ふねを見み送おくつていますと、

いつしか、青黒い沖の間に隠れて見えなくなつてしまいました。子供のころから、海を畳の上のように思っている人たちでありましたから、この荒々しい海をもおそれてはいませんでした。

日が暮れると風が出てきました。それは、思いがけない突然のことでした。急に、浪が高くなつてほえはじめました。乙は、沖に出ていった二人の友だちの身の上を心配しました。

「どうか無事に、早く、この島まで帰つてきてくれればいい。」と、祈りながら、火を焚いて闇の夜をこいでくる目じるしを造ろうとしました。そのうちに、風雨と変わつて、せつかく燃え上がった火が、幾たびとなく吹き消されたのです。けれど、乙は、熱心に、そのたびに火を新たにつけたのでした。しかし、待ちに

待まつた船ふねは、帰かえつてきませんでした。

「この暴ぼう風ふうに、どこへ逃にげただろうか？　こんな広ひろい、広ひろい、海うなばら原はらをどこへゆくというところもないのに……沈しずんでしまったのではないだろうか？」

乙おつは、もはや、気きが気きではありませんでした。そのうちに、怖おそろしい夜よは明あけ放はなれました。見み渡わたすかぎり、大おお空ぞらは、ものすごく、大おおきな浪なみ頭がしらはうねりうねっています。そして、船ふねの影かげすら見みえないのでした。

乙おつは、独ひとり、小ちいさな無む人じん島とうに残のこされたのでした。彼かれは、一いち日にち、岸きしに立たつて、船ふねの帰かえるのを待まっていました。しかし、昨きのう日ふの暴ぼう風ふうに難なん破ぱしたものが、船ふねはその日ひも暮くれかかったけれど、姿すがたが

見えぬのでありました。

三日めのことです。乙は、もうやせ衰えていました。やはり海岸に立って、いっしんに沖の方を見ていますと、なつかしい、見覚えのある仲間の乗っている船が、波を切つて湾の中へはいつてきました。甲も丙も、無事で船の上に動いているのがありありとして見えたのです。

「おうい。」と、乙は、両手を高く挙げて、沖に向かつて叫びました。すると、あちらからも両手を高く挙げて、叫んでいました。けれど、その声は、聞こえませんでした。

おりから、入り日の影が、波の上を明るく照らしました。そして、船に乗っている二人の顔を赤く彩つて見せたのです。

「ああ、なつかしい、まさしく甲と丙だ！　よく死なずに帰ってくれた。」と、乙は、目に、熱い涙をいっぱい流して喜びました。やがて、その船は、すぐ間近にまいりました。

「おうい。」と、乙はまた両手を挙げて叫びました。

甲と丙の二人は、それに対して、答えるであろうと思ったのに、音なく、船をこいで、前方を横切ったかと思うと、その姿は、煙のごとく消えてしまったのです。

乙は、びつくりしてしまいました。

「幽霊船だ！」

こういうと、乙は、がっかりとして、自分の体を砂の上に投げて泣きだしました。彼は、疲れた頭に、いろいろの幻影を見ま

した。夜中、うなされつづけました。そして、ふたたび、明るくなつたときに、彼の目は、血走つて、興奮しきつていました。ちようど、その日の昼過ぎごろでありました。乙は、顔をあげて、沖の方を見ますと、まごう方なき、なつかしい船の姿を見ました。しかも、昨日見たと同じい……幽霊船の……こちらへこいでくるのを見ました。

一時は、はつと思つて、うれしさに胸が躍りましたけれど、つぎの瞬間には、気味悪さで体じゆうがおののきました。

「こいつめ、俺まで、殺す気なのか？」と、乙は狂いはじめました。

その間に、船は、ますます近く、波を切つて、島に近づいてき

ました。乙は、腰にあつたピストルを取り出しました。そして、船を目がけて、つづけさまに火ぶたを切つたのでした。

しかし、それは、幽霊船でなかつたのか、消えなかつたのです。船が岸に着くと、二人は、陸へ踊り上がりしました。

「おお、おまえは、気が狂つたのか！」といつて、なおも、暴れ狂う乙をようやくに押さえつけました。

乙は、まったく、気が狂つてしまったのです。あの夜、二人の乗つた船は、あちらの陸に暴風のため吹きつけられました。そして、波の静まるのを待つて二人は、島へ仲間を迎えにやつてきたのでした。

二人は、気の狂つた友だちを船に乗せて、あちらの陸へと帰つ

てゆきました。それから、二人は、手あつく、哀れな友だちを介抱いほうしましたので、だんだんと気の狂くるつたのが、もとに戻かえつて、いつしかなおつてしまいました。それから、三人は、永ながく仲なかのいい友ともだちでありました。

いまだに、この話はなしは、北きたの港みなとに残のこっています。無人むじんの小島こじまは、いまも、青黒あおくろい波なみの間あいだに頭あたまをあらわしています。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「赤い鳥」

1924（大正13）年11月

※表題は底本では、「幽霊船《ゆうれいぶね》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幽霊船

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>